バルトロメオ・デ・ラス・カサス

1474 年にスペインのセビリアで生まれた。

彼が 20 歳のころ、父ペドロはコロンブスの第 2 次航海に参加しており、帰国の時連れ帰った一人のインディオ（中南米の原住民。当初そこはインドと思われていたので、インディオと呼ばれた）を息子バルトロメオに与えている。

彼は、このようにして大航海時代の幕開けと、新大陸という新しい世界に出会ったのである。そして彼自身も、1502 年に遠征隊に参加してエスパニョーラ島（現在のハイチ）に渡った。この翌 1503 年に、イサベラ女王は遠征隊総督からの報告と要請に基づいて勅令を出しているが、それには、インディオのキリスト教化を促進すること、インディオを一定数確保して労働に従事させてもよいが、正当な報酬を支払うこと、インディオは自由な人間として労働することが規定されている。

イサベラ女王は、以前コロンブスの一行がインディオを奴隷として持ち帰ったことを怒り、インディオを奴隷とすることを禁じ、彼らをカスティリア臣民と扱うことを明示した勅令を出している。ラス・カサスは、探検に参加すると共に、インディオにキリスト教を伝えようと、熱心に働いたようである。

彼は、このあと司祭となり、ハイチからキューバへの遠征隊に従軍司祭として参加したが、そこでスペイン人征服者たちのインディオに対する残虐な行為をつぶさに目撃している。本国から遠く離れていて、王の勅令は一向に守られず、金や銀、産物や土地を求めての征服は、皆殺しに近いことが平然と行われていた。この頃からラス・カサスの死ぬ頃まで、スペイン人の征服者（レコンキスタドール）の蛮行は続き、世界史にピサロ、コルテス、バルボアなどの名が残されてい

る。一方、この頃当地を訪れた宣教師モンテシーノス（ドミニコ会士）が、インディオに対する征服者たちの非道な行為を厳しく非難する説教を行っている。キューバ従軍の報酬としてエンコミエンダと呼ばれるインディオつきの農園を与えられ、はじめはそれを経営していたラス・カサスは、実態がはっきりわかってくると、悩みはじめた。そして、キューバ総督（Diego Velázquez）から聖霊降臨祭のミサを依頼され、準備のためシラ書（集会の書）34：21-27　を熟読していたとき、植民地の現状は悪であり、エンコミエンダ制の撤廃こそがインディオの惨状を救うことになるとの認識に達した。それで、彼は、ミサを拒否してまず自分の所有するインディオを解放した。

「インディアス保護官」に任命された彼の熱心な活動は、現地の征服者たちの反発をかい、彼の平和的植民計画もなかなか実現せず、挫折を繰り返したが、彼はその度に信仰に立ち戻り、福音理解を深めていった。50 歳頃、彼はドミニコ会に入り、修道誓願を立てる。これ以後、修道者としての黙想と研究から、彼の発言や行動は深められ、説得力を増したと思われる。

1552 年に出した「インディアスの破壊についての簡潔な報告」は、後世最もよく知られるものとなった。それらは今日、その当時の状況を知る上で貴重な史料となっているが、これらがオランダ、ドイツなど外国語に訳されて出版されると、政治的・宗教的に対立する外国からの、スペイン批判の材料とされた。この状況に苦慮したスペインは、ラス・カサスの著書全てを禁書とし、後世、彼は、母国からもカトリック教会からも長く無視されることとなった。彼は、死後までも孤独であった。

http://www.u-netsurf.ne.jp/dominic/dominic/seizin2.html

● バルトロメはミサを立てられなかったことをどう思いますか。